

# NHKテレビ番組『きょうの健康』における発達障害に関する語りの通時的変化—病気と個性の狭間で—

## Discursive Change of “Developmental Disabilities” in a Series of NHK Health TV Program -Between Illness and Personality-

◎西田 有香子  
Yukako NISHIDA

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程  
Graduate School of Languages & Cultures, Nagoya University

**要旨**…本発表の目的は、NHKテレビ番組『きょうの健康』の発達障害が扱われる回を分析対象として、落ち着きのなさなどの特徴が病気であると語られるのか、語りの変化に注目しながら明らかにすることにある。分析対象は、2000年から2014年にかけて放送された9本の番組である。話題の分類および種別ごとの放送時間量測定により番組構成の全体像を把握した後、質的な言説分析を行った。その結果、個性と発達障害との関係の位置づけ方や治療観は変化することを見出した。結果を踏まえ、語りの変化は、対人関係の苦手さなどの特徴を病気と捉えることに批判的な意見を意識することにより生じている可能性について論じている。

**キーワード** NHK, テレビ, 発達障害, メディア言説分析, 語りの変化

### 1. はじめに

本発表は、発達障害を取り上げるNHKテレビ番組の中で、健康情報番組である『きょうの健康』を分析対象とし、落ち着きのなさなどの特徴が病気であると語られるのか、語りの変化に注目しながら明らかにすることを目指す。今日の日本では注意欠如多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、そしてアスペルガー症候群や自閉症スペクトラム障害といった自閉症関連障害を合わせて発達障害と呼ぶことが増えているが、本発表で分析を行うのはこれらの障害と関連した番組である<sup>1</sup>。ADHDは一般的に多動、衝動性、不注意などの行動特徴に対してつけられる障害名であり、LDは読み書き・計算などのうち、極端に苦手なものがある場合によく診断される。そしてアスペルガー症候群などの自閉症に関連した障害は、コミュニケーションや対人関係構築が苦手であったり、強いこだわりがあったりする場合などにつけられる障害名である。これらの障害は、1990年頃から徐々にマスメディアで取り上げられることが増え、2000年代に入ってから特別支援教育や発達障害者支援法の支援対象となる中、マスメディアでも頻繁に話題となるようになった。『きょうの健康』では2000年から2014年までの間にこれら障害をテーマにした番組を合計10本放送しているが、本発表ではそれらのうち入手可能であった9本の番組を対象とし、その言説特性を捉えたい。

今日発達障害概念と結びつけられがちなこだわりが強いなどの特徴は、以前は病気や障害として理解されてこなかったのではないかと、経年とともに捉え方の変化が起こったのではないかとという認識のもとに、幾つかの先行研究は発達障害と医療化との関連を論じている<sup>2</sup>。医療化とは、P. Conrad とJ. W. Schneider (1992–2003: 1) によると「非医療的問題が通常は病気あるいは障害という観点から医療問題として定義され処理されるようになる過程についての記述」を意味する。もともと障害とされていなかった出来事が障害と捉えられるようになったという認識は、その捉え方の変化に対する批判的意識に結びつきやすいと考えられるが、実際医療化について論じた研究の中にはこのような定義の変更に批判的なものもある。また上述の特徴を障害と捉えることに対する違和感や批判的意見が「Yahoo!Japan 知恵袋」(Yahoo!Japan Corporation, 2015) の相談サイトへの書き込み等においても見られることがあり、一般の人々の中にもそのような意識をもつ人が一定数いるのではないかと考えられる。

落ち着きのなさなど特定の特徴の理解をめぐる捉え方の変化や見解の相違が存在すると考えられる中、2000年以降継続的に発達障害をテーマとした番組を放送してきたNHKテレビ番組ではいかなる言説が語られるのか。それは病気であると語られるのか。どのような語彙やレトリックが用いられるのか。それらは変化するか。発達障害言説というものは、人々の自己・他者理解や生き方に影響を及ぼすと考えられ、そのあり方を活発に議論する必要があると考える。なかでもNHKテレビ番組の発達

障害についての語りは日本社会に溢れる発達障害言説の中でも影響力のあるものの1つであると考えられ<sup>3</sup>、その特性を微細な揺らぎや矛盾、変化を含めて明らかにすることは意義深いと思われる。そこで本発表では、発達障害を繰り返し取り上げてきた番組の1つである『きょうの健康』の9番組に分析対象を絞り、発達障害に関する政策的対応がなされるようになり、マスメディアで話題になることが増えた時期においていかなる語りがなされるのか、特にその変化に注目しながら分析することとする。

## 2. 分析対象と方法

### (1) 分析対象

本発表ではNHKテレビ番組『きょうの健康』の発達障害が扱われる9本を分析対象とする。『きょうの健康』は1967年から続く長寿番組であり、2015年5月現在Eテレで月曜日から木曜日の20時半から20時45分に放送されている<sup>4</sup>。制作しているのはNHKエデュケーショナルである。本番組はこれまでに精神疾患を含む様々な病気や健康づくりの情報を取り上げてきた。各回のテーマに合わせて医師が医療・健康情報を伝えたり、キャスターの質問に答えたりするという構成となっている。

『きょうの健康』では、これまでに発達障害をテーマとした番組を10本放送していることをNHKアーカイブス（NHK 2015）で確認した<sup>5</sup>。本発表ではそのうちの9本を分析するが、これらの番組情報は表1の通りである。2010年放送の4番組（「気になるシリーズ」）、2013年放送の3番組（「子どもシリーズ」）はそれぞれ1つのシリーズとなっている。また、「気になるシリーズ」の全番組および「子ども原因」、「子ども向き合う」は同一の医師が出演している。なお、以下では個別の番組に言及する際、表1に記した省略名を用いることとする。分析を行うにあたり、「注目」および「気になるシリーズ」は、社会福祉法人NHK厚生文化事業団からDVDを借用した。「子どもシリーズ」および「大人」に関しては、発表者が個人的に録画・保存しているものを用いた。なお入手困難のため分析対象にすることができなかったのは、「正しく知ろう 学習障害」という番組（2008年4月10日放送）である。

表1 分析対象番組の一覧

番組の個別タイトル	放送日	出演した医師	省略名
「注目されるアスペルガー症候群」	2000/6/29	本田秀夫氏	「注目」
「子どもの行動が気になるとき(1) 場の雰囲気がかめめない」	2010/5/17	榊原洋一氏	「気になる(1)」
「子どもの行動が気になるとき(2) 落ち着きがなく衝動的」	2010/5/18	榊原洋一氏	「気になる(2)」
「子どもの行動が気になるとき(3) 文字の読み書きが苦手」	2010/5/19	榊原洋一氏	「気になる(3)」
「子どもの行動が気になるとき Q&A」	2010/5/21	榊原洋一氏	「気になる Q&A」
「気になる子どもの発達障害 その原因は?」	2013/7/15	榊原洋一氏	「子ども原因」
「気になる子どもの発達障害 どう向き合う?」	2013/7/16	榊原洋一氏	「子ども向き合う」
「気になる子どもの発達障害 症状に合った治療」	2013/7/17	広瀬宏之氏	「子ども治療」
「大人になって気づく発達障害」	2014/9/26	岡田俊氏	「大人」

### (2) 分析方法

話題の分類および種別ごとの放送時間量測定により番組構成の全体像を把握した後、質的な言説分析を行った。最初に9番組のトランスクリプトを作成し、何度も読み返しながらか分類作業を行った。その手順は以下の通りである。1) トランスクリプトを話題のまとまりごとに区切る。2) 各まとまりの話題内容をできる限り簡潔に言い表す。3) より大きなカテゴリーに分類可能か検討し、まとめられるものをまとめて、大分類カテゴリー名をつける。続いて、話題の分類で見出した大分類カテゴリーである「どんな障害かに関する説明」、「原因」、「治療・対応」、「ケースの提示」に関して放送時間量を測定した。

その後、語りの内容についてより詳細に質的な言説分析を行った。その際、こだわりが強いなどの特徴を病気であるとする捉え方がなされているか、その捉え方は変化するかに着目し、使われている語彙やレトリックに目配りしながら分析した。

## 3. 結果

### (1) 話題分類の結果

大多数の話題のまとまりは「どんな障害かに関する説明」、「原因」、「治療・対応」、「ケースの提示」のいずれかの大分類カテゴリーに位置づけられた。「どんな障害かに関する説明」に分類された話題の中で、多くの番組で取り上げられているのは、気になる行動やよくある相談内容として列挙した事柄が発達障害の可能性のあることについて、アスペルガー症候群

や ADHD などの障害特徴、障害とかがわって起こりうる問題や困難、発達障害と病気および個性との関連である。すべての分析対象番組において、本カテゴリーに位置づけられる話題が見られた。

「治療・対応」に分類された話題のまとまりもすべての番組に見られた。このカテゴリーに分類された話題の中で多数の番組で取り上げられていたのは、具体的な治療法、対応法、工夫の仕方に加えて、強み・長所を生かすことが大切であるとする語りおよび相談先を紹介したり相談を勧めたりする語りである。これら相談に関する語りは、9番組すべてに見られた。

「原因」に分類される話題のまとまりは5番組に見られ<sup>6</sup>、そのすべてにおいて脳機能の働きに言及されていた。「ケースの提示」とは、架空の人物を想定して典型的な例を示すというものであり、5番組で行われていた。なお、上記の4カテゴリーに位置づけられなかった話題としては、診断可能な年齢について、複数の発達障害の重複について、どのくらいの率の人が発達障害かなどがある。その他、番組テーマの紹介、出演者の医師の紹介、あいさつ、番組のお知らせは、多くの番組で行われているものの、考察の対象外とした。

## (2) 放送時間量測定の結果

放送時間量を番組ごとに測定し、各カテゴリーが番組中に占める割合を算出した。結果を表2に示す。なお、計測は秒単位で行い、割合に換算する際には小数点以下を四捨五入している。

「どんな障害かに関する説明」と「治療・対応」に全体としても個々の番組の割合からしても多くの時間が割かれていた。経年に伴い、「どんな障害かに関する説明」より「治療・対応」に関する話題が多くなっている傾向が見て取れる。

表2 放送時間量測定結果 単位 %

番組名	「どんな障害かに関する説明」	「原因」	「治療・対応」	「ケースの提示」	その他 <sup>7</sup>
「注目」	51	2	29	0	18
「気になる(1)」	36	5	35	8	16
「気になる(2)」	20	5	50	5	20
「気になる(3)」	34	14	28	6	18
「気になる Q&A」	18	0	40	0	42
「子ども原因」	38	21	25	0	16
「子ども向き合う」	10	0	79	0	11
「子ども治療」	7	0	77	6	10
「大人」	17	0	44	7	32
9番組の合計	26	5	45	4	20

## (3) どんな障害かを説明する語りの特性

発達障害概念と結びつけられる行動や特徴が説明される際、「できない」などの否定形や、「してしまう」、「下手」、「苦手」などのネガティブな価値判断を伴う表現が用いられるということはすべての分析番組で見られた。たとえば「注目」では、「対人関係をうまく保てない」、状況に関係なく興味のあるものに「没頭してしまう」と語られ、「大人」では、「臨機応変に対応できない」、「感情のコントロールが難しい」と述べられている。また、幾つかの特性が「気になる行動」や「よくある相談内容」として列挙された後に、発達障害概念と結びつけられることが4番組で見られた。「気になる(1)」の場合、キャスターの1人が「指示がうまく通らない」「集団行動ができない」などの行動を取り上げた後、もう1人のキャスターがそれらは子どもの特徴とかが性格ではないかと問い、それに対して最初のキャスターが「これを個性といってもいいんですが、社会生活を送る上で困難が著しい場合に発達障害と呼ばれるものがあるんです」と応答している。

この語りでは「困難が著しい場合に」と述べられ、前述の特徴を限定つきで発達障害概念と結びつけている。このように困難さに言及しながら特徴と発達障害概念を結びつける語りは、「気になるシリーズ」の他番組のみならず、「子どもシリーズ」および「大人」においても見られた。この語り方は、榊原氏、広瀬氏、岡田氏が出演する番組に共通して見られ、2010年の「気になるシリーズ」以降、定着していると言えよう。特徴と障害概念を結びつける場面以外でも、「気になるシリーズ」以降の番組では困難さに関連する表現が多数見られる。「困難」、「困っている」、「困り感」などの表現を合わせると「気になる(1)」では16回、本番組以降の8番組で平均約7回用いられており<sup>8</sup>、障害とかがわって起こりうる困難や本人の「困り感」に頻繁に言及されている。

一方、2000年放送の「注目」において、この表現は1度、アスペルガー症候群の子どもの一方的なコミュニケーションに周

困る子どもたちが困ることがあるという文脈で使われるのみである。本番組において使用が目立つのは、「問題」という語であり、否定形のものを除いて19回用いられている<sup>9</sup>。いじめや不登校について、障害理解が不十分であるために起こる問題であると述べられる他、こだわりの強さなどアスペルガー症候群の特徴自体も「問題」と語られている。「気になる(1)」以降の番組においても、前述のように「集団行動ができない」など否定表現を用いて特徴が叙述されることは多く、それらを「望ましくないもの」とみなしていると読み取れる語りは見られるが、特徴自体が問題であると明示的に語られることは少なくなる<sup>10</sup>。特性が顕著な場合に社会生活上の困難を伴いやすいこと、それゆえ本人が「困り感」を味わいやすいことに着目した語りへと変化しているのが見て取れるのである。

障害と個性との関係をいかに捉えるかをめぐっても、「注目」と他番組では違いが見られた。「注目」では、「いわゆるしつけや性格の問題ではなくて、(あの)アスペルガー症候群が発達障害と考えられている理由があるんですが」<sup>11</sup>と述べられ、アスペルガー症候群は個性とは異なるものとして位置づけられていた。また本番組では、アスペルガー症候群の人は「普通の教わり方で教わってもなかなかうまく獲得できない」と述べられるなど、「普通」とか「一般的」な状態と本障害をもつ状態とを対比させる語りが見られた。「気になる(1)」以降では、障害と個性の位置づけが変化し、その両者が明確に区分けできるようなものではなく、互いにつながり、重なり合うものとして捉えられているのが見て取れる。前述の「気になる(1)」の引用箇所でも、発達障害概念が紹介される際、キャスターは「これを個性といってもいいんですが」と前置きをしていたし、「子ども治療」では発達障害は「理解や配慮や支援の必要な個性」と語られている。ただし「気になる(1)」以降の番組において、発達障害は個性であって障害ではないと語られるわけではなく、この点については4章で論じたい。

#### (4) 原因に関する語りの特性

5番組で障害の原因について問いが寄せられ、そのすべての回答において脳機能への言及が見られた。「注目」では「なんらかの脳の機能の異常があるというふうには考えられております」と述べられ、「子ども原因」では脳のイラストが示されながら「実行機能がうまく働かない」と語られている。これらの語りからは、発達障害を個人に内在する病理的問題として捉えていることが見て取れる。また、「気になる(1)」、「気になる(2)」、「子ども原因」の3番組において原因に関する語りのすぐ後に、生まれつきのものであることや育て方のせいではないことが述べられていた。「子ども原因」においては、遺伝という言い方もなされている。

「気になるシリーズ」、「子どもシリーズ」では、すべての回で原因に関する語りが見られるわけではないが、シリーズの中で1度は原因が話題となっていた。2014年放送の「大人」では「原因」という言葉が用いられていない。またこの番組が他番組と異なっているのは、発達障害は「脳の働き方の違い」と語られている点である。この語りでは脳機能が話題となっていないが、「異常」、働きが「不十分」など他番組で見られる否定的価値判断を伴う表現を用いていないのである。

#### (5) 治療・対応に関する語りの特性

分析番組では「治療」、「対応」、「対策」、「工夫」など様々な表現が用いられ、多様な方法が提案されていた。医学的意味合いの強い「治療」という言葉は、「対応」などの語と厳密に区別されることなく使われているのが散見され、たとえば「気になる(2)」では、聞き手は「どういう対策を取ればいいんでしょうか」と質問を投げかけているが、その際に提案される行動療法、薬物療法、環境改善法、クリップボードに示された図では「ADHDの治療」とされている。このように、教室環境、住環境の整備を「治療法」として紹介することは他番組にも見られた。

1節で述べたように相談先の紹介が行われたり相談することを勧めたりする語りはすべての分析対象番組に見られた。その他に複数の番組に見られた特徴的な語りには、強み・長所を生かすことが大切であるとする語りと治るのかを問う語りがある。

「注目」では、アスペルガー症候群の特徴が「問題」とみなされていることについて前述したが、特定の物事への強い関心について、「先ほどはこだわりと申しましたけれども」と述べた上で、「豊富な知識」、「特殊な技能や才能」になりうる語っている箇所があり、特徴の強みに目が向けられていた。いったん「できない」などのマイナス表現を用いて障害特徴の説明を行った後に、特徴は強みとなりうるためうまく生かすことが大切であると語られることは、「気になる(2)」および「大人」においても見られた。

治るかどうかをめぐっては、「注目」では、治療法があるかという質問に医師が「症状を完全になくすという方法は(あの)まだない」と答え、キャスターが深刻そうな面持ちで「完全な治療法は今のところ見つからない訳ですよね」と応じている。このやりとりからは、アスペルガー症候群の特徴は「症状」であり、それは可能であれば「完全に」消失させることが望ましいものであるという捉え方が前提されていることが読み取れる。このような治療観は後の番組では変化している。特に違いが明確に表れる「子ども原因」では、診断された場合に治療が行われるのかという問いかけに対し、医師は発達障害は病気

というより個性みたいなのであると述べた後、「ですから（その）基本的な所は（この）治すということじゃないんです」と語っている。ここでは、発達障害概念と結びつけられがちな特徴そのものは治療により消失させるべきものではないという考えが示されているのである。ただし、本番組は治療が不必要であると主張したいわけではないと考えられ、先ほどの引用部分のすぐ後には本人自身の困難を軽減し、二次障害を防ぐために対応を工夫することが大切であると述べられ、さらに医療機関への相談を勧める語りへとつながっていく。これら一連の語りは、本人の抱える困難さに注目した上で、それに対処するために治療は必要であるという考え方が示されている点、発達障害の特徴そのものと二次障害である自尊感情の低下や社会的不適応とを区別し、治療という医学的介入は二次障害の防止のために必要であるとされている点が特徴的であると言えよう。

「子どもシリーズ」の他番組では、「子ども原因」の治療観と重なり合っている点が見られ、「子ども治療」では、発達障害自体が「治るということではちょっと違う」とされた上で本人がづらい思いをすることや二次障害の防止のために薬物治療を勧める語りが見られる。分析番組で治療という言葉が使われること自体に変わりはないが、その治療観は一定ではなく、何を治療すべきか、なぜ治療すべきかをめぐり語りは変化していることが見て取れる。

#### 4. 考察

本章では前章に示した結果を踏まえ、落ち着きのなさなどの特徴が病気であると語られているかという問いに立ち返って考察を行いたい。

分析番組では「発達障害は個性であり病気ではない」とか「治療の必要はない」と語られることは決してない。また、全番組で医療機関への相談を勧める語りが見られたこと、8番組で発達障害の原因が脳機能の不具合にあると語られていたことは見逃すべきではないだろう。原因に関する語りの放送時間量は多くはないが、その語りは本発表における問題意識からすると決して看過できない部分であると考えられる。しかし、前章に見たように特徴の説明の仕方や治療観は変化していたという点にも目を向ける必要がある。

『きょうの健康』における発達障害に関する語りの特徴的な変化として、以下の2点が挙げられる。まず、発達障害と個性とのかかわりをどう捉えるかをめぐり変化が見られ、対人関係下手などの特徴は個性ではないとする語りから、個性とも捉えられるとする語りへと移り変わっていた。第2に特徴自体を「問題」と捉える語りから本人の「困り感」に着目した語りへと変化していた。そして、発達障害概念と結びつけられる諸特徴は個性とも言えるとされながらも、本人が抱える困難さを強調しながら、治療の必要性が主張されるようになるのである。また、「大人」では発達障害は「脳の働き方の違い」と語られており、脳機能に言及する際に「大人」以前の番組に共通して見られた否定的価値判断を伴う語りから変化していた。

このような変化が生じたのは、発達障害の特徴や原因、治療についていかなるメッセージを発するかをめぐり、病気と個性の狭間で伝え方が試行錯誤された結果であると思われる。そして、語りの変化には、多動などの特徴を病気と捉えることに批判的な意見を意識することが関係しているのではないかと考えられる。「気になる(1)」の「これを個性といってもいいんですが」という前置きや、「気になるシリーズ」以降頻繁に見られる多動などの特徴は誰にでもよくあることという趣旨の語りは、批判的意見が意識された上でなされている可能性がある。これらの語りは従属節の中で逆説の接続表現を用いて語られたり、「しかし」で始まる語りにつながられたりしていることが多く、その直後には「気になる(1)」の他、「気になる(2)」、「大人」においても本人が困っている場合に限定した上で発達障害概念と結びつける語りがなされている。

対人関係が苦手などの特徴を病気と捉えることに批判的な意見の存在が意識されていることが語りの中にはっきりと表れていることもあり、「子ども原因」では「色々な意見があつてですね、この発達障害っていうのは個性なんだと。性格なんだから（省略）治療するもんじゃないっていう考え方もあつたんですね」と語られている。また「子ども治療」では「発達障害は個性だから治療の必要はないとおっしゃる方もいらっしゃいますが」と述べられる箇所がある。これらの引用部分では、批判的見解が存在することが明示されているが、前者では「あつたはあつた」と過去のこととして述べられ、後者ではやはり従属節の中で逆説の接続表現を用いる形で語られている。そして、これらの語りの直後には、前者においては二次障害を防ぐために医療機関への相談を勧める語りが、後者の場合は「本当は理解や配慮や支援の必要な個性」という前述の語りが続くのである。批判的見解を意識しながらも完全に同意するのではなく、いかに扱い、距離を取るかをめぐって試行錯誤がなされる中で、このような語り方がなされたのではないかと考えられる。

本発表で明らかにする語りの変化は、多様な特性をもつ人々をどのように理解し、その人々といかにかわるかをめぐる模索の中で生じたものだと考えよう。落ち着きのなさなどの特徴の捉え方をめぐり異なる見解が存在する中、特徴をいかに捉え、伝えるかをめぐり、病気と個性の狭間で試行錯誤がなされたことで、語りは変化したのだと考えられる。

本発表にて指摘する語りの変化が他の発達障害を扱う NHK テレビ番組においても見られるのかを明らかにすることは今後の課題である。また、社会の中の発達障害言説の変化と NHK テレビ番組における変化との関係性についても今後考察を行いたい。

## 補注

- 1 障害名に関しては、別の障害名（例えば ADHD の場合には「注意欠陥多動性障害」などと言われることがある）が使用されることがある。表記（例として「AD/HD」）が採用されることがある。
- 2 このような研究の例として、日本には木村(2004)や佐々木(2006)がある。
- 3 この点を実証したデータは見当たらないが、まず、A. Giddens (1991=2005) が指摘するように現代に生きる人々にマスメディアの語り及ぼす影響は大きいと考えられるし、メディア言説の中でもテレビ放送の影響力は大きいと思われる。その中でも NHK は発達障害を扱うテレビ番組を多数放送しており、これら番組が一般の人々に与える影響は大きいと言えよう。もちろん、番組の語りの人々に一方的な影響を与えている訳ではない。受動的な視聴者像を想定し、批判的な視聴はなされないと考える訳ではないが、なおも NHK テレビ番組の発達障害言説は社会的影響力が強く、人々の認識に影響を及ぼす側面があると言えよう。
- 4 平日 13 時 35 分から 13 時 50 分に再放送がある。
- 5 「NHK クロニクル」のホームページからアーカイブ保存番組の情報を検索した。検索の際のキーワードは「きょうの健康 発達障害」、「きょうの健康 学習障害」、「きょうの健康 アスペルガー」、「きょうの健康 ADHD」である。検索結果として表示された番組には本文中で述べた 10 本の他に「難治性てんかんの最新治療」があるが、番組内容紹介文を読み、発達障害が主テーマとなっている番組ではないと判断した。
- 6 その他、「子ども治療」においても、発達障害が治るのかどうかに関する語りの中で、原因には遺伝子が関わっており、脳の働きが不十分で起こると語られているが、この語りは話題のまとまりレベルでは「治療・対応」カテゴリーに分類した。
- 7 「その他」には、左記の 4 カテゴリーに位置づけられなかった話題のまとまりのすべてを含んでいる。
- 8 「悩み」などの類似の表現は含んでいない。また、「困難が生じない」などと否定形で語られている箇所はカウントから除外している。なお小数点以下は四捨五入している。
- 9 他番組では「問題」という語は「子ども治療」において 5 回用いられている。その他の番組では否定形を除くと平均約 1 度しか使用されない。
- 10 ただし特徴が「問題」であると語られることがまったく見られなくなったわけではない。「気になる Q」では ADHD の特徴を「問題」とする語りが見られる。
- 11 読みやすくするため、「あの」、「その」などの内容理解にかかわりの薄い言葉は丸括弧内に記している。また、語りの最中に聞き手が「はい」、「あー」などとあいづちを打っている部分は省略している。以下の引用箇所でも同様とする。

## 参考文献

- Bignell, J., 2013, *An Introduction to Television Studies* (Third Edition), London: Routledge.
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社。)
- Conrad, P. and J. W. Schneider, 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness* (Expanded Edition), Philadelphia: Temple University Press. (= 2003, 進藤雄三監訳・杉田聡・近藤正英訳『逸脱と医療化——悪から病いへ』ミネルヴァ書房。)
- Fairclough, N., 2003, *Analysing Discourse: Textual Analysis for Social Research*, London: Routledge. (= 2012, 日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳『ディスコースを分析する——社会研究のためのテキスト分析』くろしお出版。)
- 木村祐子, 2004, 「子どもの不適応行動の医療化——『学習障害』概念の制度化過程」『Sociology Today』(14): 18-30.
- NHK, 2015, 「NHK クロニクル」, NHK Online, (2015 年 5 月 28 日取得, <http://www.nhk.or.jp/chronicle/index2.html>).
- 佐々木洋子, 2006, 「ADHD と医療化」森田洋司・進藤雄三編『医療化のポリティクス——近代医療の地平を問う』学文社, 181-93.
- Yahoo! Japan Corporation, 2015, 「Yahoo! Japan 知恵袋」, (2015 年 5 月 28 日取得, <http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>).

## 謝辞

本発表内容は、「鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金」に助成いただいた研究の一部として行ったものである。